

白夜を駆けぬけろ

text by Shinji Ishii
文 いしいしんじ

六才の息子ひとひとそろって楽しみにしているのが、2017年度からの、トヨタの世界ラリー選手権(WRC)復帰だ。「ヤリス」(日本名ヴィッツ)をベースにしたラリーカーについては、早くから公開されていたが、昨年末ぎりぎりになって、ドライバーに関してとんでもない発表がなされた。

ここ4年間、WRCはフォルクスワーゲンの展示会のような状態だった。51戦中42勝をあげ、堂々、4年連続してチャンピオンに輝いた。が、昨年11月、フォルクスワーゲンは、WRCからの撤退を表明。2015年に発覚した、排ガス規制の不正事件が影を落としている。

世界中の注目を集めていた、ドライバーたちの行き先が、年末に発表された。4年連続チャンピオンのセバスチャン・オジェは、フォード

フォード・エスコートをもらったのは8歳のときらしい。モータースポーツの肝要であるなめらかな重心移動を、おそらく国民全員が身につけている。千葉や栃木あたりの走り屋より、ちよつとそこまで買物、といったヘルシンキの老婆のほうが、よほどスムーズに高速コーナリをすべり抜ける。

と書いて、こんなおばあちゃんが登場しそうな映画作家のことを思いだした。アキ・カウリスマキもフィンランドのひとだ。カウリスマキ映画のおばあちゃんなら、運転しながらきつと不注意で男をひく。ひかれた相手は記憶障害となり、職場からも家族からもはじき出される。おばあちゃんと男は、意思の疎通がまるつきりうましくない共同生活のなかで、互いの人間性をひとつひとつ見つけていく(あくまで僕の創作、創造です)。

カウリスマキ映画の印象だけで判断するわけではない。が、フィンランドの国民性は、大学まで教育費無料、洒落た町並み、華やかなモータースポーツといった光の面だけでなく、長い長い冬、不況、アルコール中毒、間近な死といっ

に移籍。セカンドドライバーを務めていたヤリマティ・ラトバラは、トヨタ・ヤリスのハンドルを握ることになった。野球でいえば、他チームの四番、三番バッターが、開幕直前、突如移籍してくるようなもの。

過去16勝をあげているこのラトバラ、親子二代のフィンランド人レーサーである。ピンとくるひとはピンとくる話だが、2016年度のF1グランプリ世界チャンピオン、ニコ・ロズベルグもやはり、フィンランド生まれ、父親も伝説的なF1のチャンピオンドライバーだった。

WRC史上、フィンランド人の名レーサーは、きら星のように出現している。思いついた順に、ユハ・カンクネン、マルク・アレン、ハンヌ・ミッコラ、トミ・マキネン、アリ・パタネン、マーカス・グロンホルム。

た黒い影にも、強く裏打ちされているだろう。

WRCで、もうひとり忘れがたいフィンランド人レーサーがいる。ヘンリ・トイヴォネン。1980年代半ば、「狂気」とさえいわれたカテゴリー「グループB」で活躍。1986年5月2日、ツール・ド・コルスの2日目、トイヴォネンの駆るランチア・デルタは崖から落下し、木の幹に車体を挿し抜かれて炎上。助手席のクレストとともに、トイヴォネンは焼死した。その死を境に、「グループB」は廃止され、より安全なレース規制がとられるようになった。

スキージャンプの名選手ニッカネンの名をお

F1ドライバーを思い返せば、ケケ・ロズベルグは別格として、ミカ・ハッキネン、ミカ・サロ、J.J.レートと、日本でおなじみのレーサーたちの顔が浮かぶし、現役チャンピオンのキミ・ライコネン、若手ホープのバルテリ・ボッタスといった名もあがる。

人口550万の国から、世界的なドライバーがこれほど輩出されている。「ムーミン」だけじゃないのだ。国民性、環境、教育等々、フィンランドの人は、よほどモータースポーツに向いている。

雪に閉ざされていることがよく理由としてあげられる。赤ん坊から「氷上のF1」ポブスレーナみにガンガン車を飛ばすし、物心がつけば自転車代わりにスノーモービルで雪の斜面を下りフトしまくるという。息子ラトバラが父から

ほえているひとは多いだろう。冬季五輪で4個の金メダルを獲得し、世界選手権での最多勝を誇った「フライング・フィン」「鳥人」は、その後生活が荒れ、メダルを売り払い、ストリップのショーに出る。暴行事件をくりかえし、妻への殺人未遂で逮捕される。

暗い影があるから、思い切りアクセルを踏み、ハンドルを切れる。真っ黒い風を切り裂き、光を得るため、ジャンプ台を力強く踏み切つて虚空へと飛び出す。えんえんと広がる闇を内に秘めた、おだやかな笑顔。フィンランドのひとは、誰もがその胸のなかに、永遠を匂わせてつづく一個の白夜をもっているのだ。



フィンランド共和国

面積: 33.8万平方キロメートル(日本よりやや小)
人口: 約549万人(2016年4月末時点)
都: ヘルシンキ(約62万人、2015年末時点)
語: フィンランド語、スウェーデン語
教: 福音ルーテル教(国教)、正教会(国教)



Profile
1966年大阪生まれ。
京都在住。
著書に小説『ぶらんこ乗り』『妻ふみくづエ』『ポーの話』『みずうみ』『四とそれ以上の国』など、エッセイ『人生を救え!』(町田康共著)『熊にみえて熊じゃない』『速い足の話』、絵本に『赤ずきん』(ほしよりこ絵)など多数。